

効果的なナルトビエイ対策について

浅海干潟研究部 諸熊 孝典

はじめに

有明海及び八代海の干潟漁場は、かつて全国有数のアサリ及びハマグリ生産地でしたが、平成元年頃から、漁獲量が減少し、現在も、かつての盛況を取り戻すには至っていません。この間、漁業者の皆さんは、漁場環境改善、食害生物の駆除及び資源管理等、地道に資源回復のための取組みを実践されています。当センターにおいても、資源回復のために研究しているところですが、この一環として実施している、近年アサリの食害生物として問題視されているナルトビエイに関する研究について紹介します。



図1 八代海灣奥部で採捕されたナルトビエイ

調査内容について

■どれくらいの量のアサリを食べるのか？

ナルトビエイが食べるアサリの量を把握するため、ナルトビエイ（体盤幅 91cm、体重 10.1kg）の飼育試験を行い、食べるアサリの量を調べました。試験の結果、ナルトビエイは、殻付きアサリを1日平均で 3.4kg、最大で 6.2kg を食べました。体重に対しては1日あたり平均で 33.7%、最大 61.0%（軟体部換算では平均 5.7%（最大 10.3%））を食べたことになりました。

■ナルトビエイがアサリを食べた痕は？

ナルトビエイとアカエイを当センター内の実験池で飼育し、潜砂させたアサリをどのようにして食べるかを観察しました。ナルトビエイは口を砂に突っ込んで、掘り返すようにしてアサリを食べるため、アサリを食べた後には干潟表面に細長い食痕が残りました（図2）。



図2 ナルトビエイの食痕

一方、アカエイは飼育期間中アサリを食べることはありませんでしたが、干潟表面に潜るとき、ナルトビエイの食痕とは異なる丸い穴（潜砂痕）が残りました（図3）。実際の漁場で、ナルトビエイによるアサリ食害状況を確認するときは、穴の形状に注意して観察する必要があります。

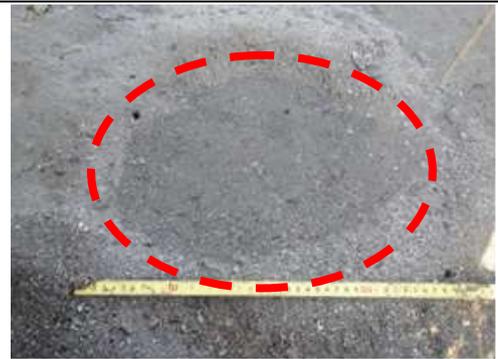


図3 アカエイの潜砂痕

■効果的なナルトビエイ対策は？

干潟漁場では、ナルトビエイの食害からアサリを守るため、保護区を設定し、防護柵（FRP支柱）を建て、ナルトビエイの侵入を防止する対策をとっている漁協もあります。（図4）。



図4 FRP支柱の防護柵（有明海）

この対策について、効果的な防護柵の間隔を検討するため、飼育試験を行いました。試験の結果、防護柵の間隔は、対象となるナルトビエイの体盤幅の1/3以下にする必要があることが分かりました（図5）。

実際の干潟漁場に出現するナルトビエイは、およそ体盤幅45cm程度ですので、防護柵の間隔は15cm程度が必要（1mあたり5本）となり、また、防護柵を設置する期間は、ナルトビエイの食害被害を防止し、アサリを保護するという観点からも5月から10月まで必要です。

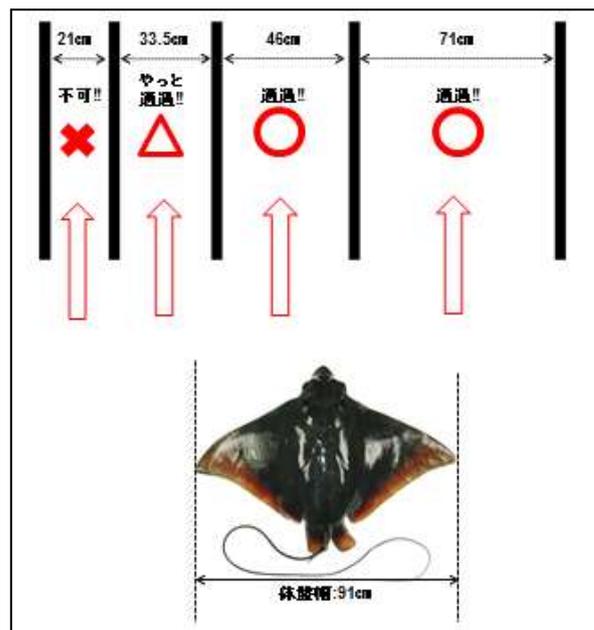


図5 ナルトビエイ防護柵通過試験の結果

今後について

【熊本県アサリ・ハマグリ資源管理リファレンス～ナルトビエイ対策編～について】

これらの研究結果については、平成 29 年 3 月に「熊本県アサリ・ハマグリ資源管理リファレンス～ナルトビエイ対策編～」として取りまとめました。この資料は、漁業者や漁協役員や職員、市町村担当者の方々を対象に、食害生物としてのナルトビエイの生態等の知識を身につけ、ナルトビエイ対策の取組みの参考となるよう、作成したものです。今後、各地で開催される講習会等で配布していく予定です。

